脊髄損傷：3名の患者における異所性骨化に対するサイロカルシトニンの効果

Spinal cord injury: Effect of thyrocalcitonin on periarticular bone formation in three subjects./Naftchi, N.E. et al.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., **60**, 280–283, 1979.

【異所性骨化，Ca イオン，シンチメトリー】

異所性骨化を有する脊髄損傷者3名を対象に，サイロカルシトニンの治療効果を判定した．対象とした脊髄損傷者は，症例1（45歳）が Th_{11}–L_1 レベル，症例2（27歳）が C_{6-7} レベル，症例3（36歳）が C_7–Th_1 レベルの脱臼骨折によるもので，それぞれ両股関節，右膝関節，左股関節周囲に異所性骨化が認められた．判定方法は，サイロカルシトニンの投与（1カ月間，計 200MRC 単位）前後における血清 Ca イオン値，^{18}F シンチメトリーの結果，臨床所見等とした．その結果，症例1では血清 Ca イオン値の減少，^{18}F uptake の減少，関節可動域の改善（25°）が明らかに認められたが，他の2症例では同様の結果が得られなかった．著者らはこのことについて，症例1では，骨化の時期がサイロカルシトニン投与前2年4カ月と長かったのに対し，症例2，3ではそれぞれ5カ月，3カ月と短かく，サイロカルシトニンの刺激が，骨の成長によって隠されてしまった為と述べている．（横浜市大　伊藤　利之）

一過性脳虚血にたいする脳梗塞予防法として，抗凝固療法と抗血小板凝集療法との比較

Anticoagulant vs anti-platelet therapy as prophylactic against cerebral infarction in transient ischemic attacks./Olsson, J.E. et al.: Stroke, **11**, 4–9, 1980.

【TIA, RIND, 抗凝固療法, 抗血小板凝集療法】

TIA を起こした患者にたいして抗凝固療法が（Ac）脳梗塞予防上有効なことは認められているが，十分な管理のもとで行っても10%程度の出血はまぬがれないとされている．

今回 TIA および RIND にたいし，AC と抗血小板凝固療法〔アセチルサルチル酸 12 mg/kg/日＋ジピリダモール（ペルサンチン）2 mg/kg/日〕（ASA＋DP）のいずれが有効かの検討を行った．

TIA または RIND で入院した156例の患者にたいしてまず2カ月間 Ac（ヘパリン，クマリン系）を行い，その後135例（TIA 61例, RIND 74例）について，無作為に2群に分け，1群（68例）は Ac を続行し，他群（67例）は ASA＋DP に切りかえ，12カ月間余追跡を行った．

その間，AC 群では脳梗塞1例，脳出血1例をみたのにたいし，ASA＋DP 群では3例の脳梗塞を起こし，有意差にはいたらなかったが，心筋梗塞による死亡例が前者4例にたいし，後者は1例にとどまった．

しかし，2年後まで追跡してみると AC 群の脳梗塞8例にたいし，ASA＋DP 群では22例であり，0.1%以内の有意差となった．しかし，前者では脳出血死2例を含む出血性合併症が後者より有意に多く，後者のほうが梗塞予防効果は前者より劣るが，より安全な方法であるといえよう．（七沢病院　福井　圀彦）

塩辛さにたいする味覚と年齢との相関

Age-related differences in salt taste acuity./Grzegorczyk, P.B. et al.: J. Gerontology, **34**, 834–840, 1979.

【塩気，味覚，老齢】

身体機能が老化とともに低下する中で，味覚はあまり影響を受けないものの一つであるが，塩辛さにたいする味覚だけは別で，加齢とともに閾値が上昇してゆくものと考えられ，老人の食思不振，低栄養とも関係があり，栄養指導上の一つの問題点とされていた．

しかし，老人の唾液中 Na 濃度が上昇していることが知られてきており，それが塩気にたいする閾値上昇に関係深いものと考えられる．

したがって，味覚のテストではその度ごとに口をゆすいで，唾液や先行テストの影響などを洗い流すことが絶対必要である．

各種濃度の食塩水と蒸留水をペアーにして，前者の濃いほうから，15～30秒間口にふくませ，塩気を感ずるほうをあてさせる．しだいに濃度を下げてゆき，誤った答（蒸留水を選んだ場合）が出たときには濃いほうに正答が得られるまで逆行し，再び淡いほうへと戻り，これを6回繰返し，折り返し点の平均値を閾値とする．

この方法によると従来考えられていたほどには塩気にたいする味覚は低下していないことが明らかになった．（七沢病院　福井　圀彦）

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/08 19:08:49

腕神経叢ニューロパチー，その電気生理学的評価

Brachial plexus neuropathy. An electrophysiologic evaluation./Flaggman, P.D. et al.: Arch. Neurol., **37**, 160, 1980.

【腕神経叢ニューロパチー，運動神経伝導度，知覚神経伝導度，筋電図，F波】

1976年1月から1978年9月までの間に腕神経叢ニューロパチー（BPN）と診断された特発性のもの16例，二次的のもの15例について病歴調査および一部について追跡調査を行っている．特発性群は，肩部痛につづいて亜急性の脱力が起こり，何週ないし何カ月かの経過の後に改善したもの，二次的群は外傷，悪性腫瘍，放射線治療などによって生じたものである．運動神経，知覚神経の伝導速度測度は，後者の方が異常が多く特発性群の1/3，二次的群の全例で異常であった．針電極による筋電図検査では1例を除く全体に fibrillation pot. が見られた．また傍脊椎筋でこの脱神経波形を見出すことは髄内病変でのみ見られるので，BUN と区別するのに有用であった．その他，Erb の点からの運動神経伝導速度，同じく知覚神経伝導速度，F波の潜時の測定も一部の症例に行われているが，BPN の原因の鑑別には有用でなく，原因は臨床的に鑑別し，電気生理学的検査は傷害の局在決定に役立てるのが適当と考えられた．

（中央鉄道病院　土肥　一郎）

慢性関節リウマチの肝障害の頻度と病因

Studies on the frequency and pathogenesis of liver involvement in rheumatoid arthritis./Fernandes, L. et al.: Ann. rheum. dis., **38**, 501-506, 1979.

【RA，肝障害，乾燥症候群，細胞免疫】

100例の RA（罹病期間 11±10年）の45％に Al-p あるいはガンマグルタミールトランスペプチダーゼ，ないしは両者の異常が認められた．HB 抗原は全例陰性，HBs 抗体は15％に認められたがこれは対照と同頻度である．年齢，性，罹病期間，重症度，薬物，飲酒歴との関連はみられなかった．興味あることは，眼球乾燥，口腔乾燥症状を伴っている症例では，高 Al-p 値を示すものは58例中27例で；上記症状を伴わない症例42例中8例に比し有意に高率であり，また Al-p そのものも有意に高値であった．慢性活動性肝炎や原発性胆汁性肝硬変に関節症を合併することが指摘されているが，著者らはすでに RA あるいは原発性胆汁性肝硬変に合併する乾燥症候群において，正常人胆管に存在する胆汁性抗原と交叉反応を示す唾液腺抗原の細胞性免疫応答を認めており，RA における肝障害も同様な機構が働いていることが推定され，今後検討が必要であろう．

（中伊豆温泉病院　間　得之）

慢性関節リウマチの関節炎症活性評価とX線像進行

The clinical assessment of joint inflammatory activity in rheumatoid arthritis related to radiological progression./Young, A. et al.: Rheum. & Rehab., **19**, 14-19. 1980.

【RA 関節炎症活性評価分類，X線変化】

RA 関節の炎症活性を3つのカテゴリーに分けた．すなわち，1）高度活動性：多数の関節に広汎な滑膜炎があり，朝のこわばりが数時間以上，2）中等度活動性：2～3の関節あるいは腱鞘に滑膜炎あるいは朝のこわばりのあるもの，3）非活動性：こわばりは30分以下，関節症状は機械的要因あるいは原発性ないし続発性 OA に帰せられるものとした．94例（♂52，♀42）の RA (classical～probable) を prospective に年4回受診で3年間追及し，年1回手と足の X-P をとり，これは別の者が評価した．上記活動性とX線上のエロジオン，裂隙狭小化より判定した進行度とは0.1％以下の危険率で有意の関係がみられた．すなわちX線像上停止状態にあるものは，非活動性39例，活動性17例，進行性X線変化のあるものは，非活動性で0，活動性で38例であった．間歇的に活性を示した33例についてみると，X線像停止性のもの12例，進行性のもの11例で，前者は3年間12回受診のうち活動性と認められたのは4回以下であり，これに反し後者ではすべて4回以上であった．X線上停止性でありながら活動性の持続した5例のうち3例は Pred. 5mg 以上使用でしかも関節変化が高度でそれ以上の進行を認め難いものであり，他の2名は発病1年以内に全療法を始めた3.5年罹患の症例である．ARA 臨床委員会の関節スコアと著者らの上記 simple global assessment との対比は極めて良好であった．

（中伊豆温泉病院　間　得之）

2026/10/08 19:08:49